

**<書評> 『ボンヘッファー説教全集1・2・3』（新
教出版社、2004）**

著者	大柴 譲治
雑誌名	ルーテル学院研究紀要
号	55
ページ	25-27
発行年	2022-03-01
URL	http://doi.org/10.34479/00000685



『ボンヘッファー説教全集1・2・3』 (新教出版社、2004)

大 柴 讓 治*

「死に至るまで忠実であれ。
そうすれば、あなたに命の冠を授けよう。」
(ヨハネの黙示録2：10)

しばらくボンヘッファーから遠ざかっていたが、人生の節目で私には必ずボンヘッファーに呼び戻されるような「時」が与えられる。不思議なことである。ボンヘッファーに対峙するにはかなりの勇気が要る。自分の不徹底さが鏡の前に立つように暴かれるからである。おそれとおののき。しかしそのただ中で示される慰めと平安。そのようなアンビバレントな思いは、彼の著作を読む者に共通するのではないか。そしてそのような思いこそ、私たちにとって今この「時」に必要な覚醒への呼びかけなのであろう。この書評はもともと『説教黙想アレテシア』（日本基督教団出版局、2005 No.48）のために書いたものがベースになっている。16年前、私が48歳の時に、彼の説教と格闘する中で示されたことを、今一度このCOVID-19の状況の下で聴き取って記し直してみ

たい（数字はページ）。

この説教全集全三巻に収められた説教と黙想は断片も含めて112編。1925年から1944年、彼の神学生時代から処刑の前年、19歳から38歳までをカバーしている。第一巻、1925年から40年までの説教は本邦初訳ということで価値が高い。各時代区分にある1ページの解説も簡明にして要を得ていて、各巻末の解説や第三巻にある全体索引と共に有り難い。全巻を通して読むと、嵐のような時代状況の中でひたすら心を静めて神のみ言に耳を傾け、現臨するキリストの前に立ち、その声に忠実に聴き従っていった一人の説教者の歩みが浮かび上がってくる。今から65-80年前の説教者ボンヘッファーの全体像が現代に鮮やかによみがえったことは意義が大きい。訳者と出版社の労に感謝したい。

第三巻の解説に森平太氏が記しているように、彼はまさに「死に至るまで説教者であろうとした」。「『究極より前』のものの中でこそ、それを越える、それを生かす『究極的』なものを、人々に向かって指し示す存在として、御言葉の宣教者であった」(III 222)。

それにしても、ここに収められたボンヘッ

* Oshiba, George J.
日本福音ルーテル大阪教会

ファーの言葉は実存的でありつつ、主題も展開も明晰判明で正鵠を射ている。構成に少しの無駄もない。常に完全原稿の作成を心がけた彼の説教スタイルは、彼自身が優れたピアニストであったこととも無縁ではあるまい。彼自身の言葉を借りて言うならば、「自然で非陶酔的な、また情熱的で客観的な態度」(『説教と牧会』31)がそこにある。

記者の優れた資質にも拠ってしようが、ボンヘッファーの表現は控え目でありつつ詩的で美しい余韻を残す。彼の場合、言葉におけるアーティキュレーションの確かさとイメージの豊かさも味わいの一つである。例えば詩編 42 による説教。「あなたは、冷たい秋の夜、森の中で、耳にしみ透るような鹿のなき声を聞いたことがあるだろうか。森全体が、渴望のあえぎにふるえる。それと同じように、ここでは、人間の魂が、地上のものを慕ってではなく、神を慕ってあえいでいる」(III3)。ペテロの涙についてはこうだ。「ペテロは外に出て激しく泣いた。ペテロの教会は、ただ単に告白する教会、否認することもある教会というだけではない。それは、さらに、泣くことのできる教会でもある。『われらは、バビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した』(詩 137)。それが教会なのだ。この涙を流すことこそ、変える道を見いだしたこと、帰郷に向かっていること、父の前に泣きながらひざまずく放蕩息子であることにほかならないからである。ペテロの教会は、喜びに至る、神の御心に添うた悲しみをなす教会である」(II 150)。ちなみに私は酉年生まれであるせいか、鶏の鳴声と主のまなざしとペテロの涙の関係がどうも気になってならないのだ。その他列挙すればキリがないので自ら本文にあたっていただくこととしよう。

彼は詩編 98:1 の説教でこう語る。「たとえて言うならば、人の魂は一つの堅琴であって、神の言葉はその魂の演奏者である」(II 198)。読み終えてみるとまことに深く魂に交響する神の堅琴を聴いた感がある。

ボンヘッファーにおいてはその信仰と神学と実

践との間に乖離がない。語られた言葉と生きられた生が一つである。それゆえその著作を読む者は鋭く自らの実存を問われる。ましてや今回は彼が生涯「全情熱を注いだ」(ファイル) ところの説教だ。普段は「いい加減はダメだけど、良い加減ぐらいがいい」などと言っている私自身、「あなたはキリストに服従しているか」と鋭く問われた。彼の前ではごまかしがきかない。ボンヘッファーは人間の闇の一番深い所、罪と恥のどん底に降り立って下さったキリストのリアリティを見据えて目を離さない。ペシミズムでもオプティミズムでもなく、信仰のリアリズム！ 臨在するキリストにひたすら信頼し、彼自身がそこから戒めと慰めと希望を得たところの神の言を会衆に取り次ぐ。その一貫した真摯な姿勢がそれに触れる者の心を打ち、悔い改めを迫り、十字架の前に立たせる。

「神を主たらしめること、すなわち、信じることを妨げる最大の邪魔者は、私たちの臆病である」(II 127)。これは自らの弱さと破れを見つめている者だけが語り得る言葉である。ボンヘッファーは自らの弱さを見つめて逃げなかった。だからあの「私は一体何者か」という獄中詩を書くことができた。「私は一体何者なのか。…人の前では偽善者で、自分自身の前では軽蔑せずにはおられない泣きごとを言う弱虫であろうか。…私は一体何者なのか。この孤独な問いが私をあざ笑う。私が何者であるにせよ、ああ神よ、あなたは私を知り給う。私はあなたのものである」。

生涯を通して具体的に神と人との前に自らの罪を告白し続けたボンヘッファー。彼は「罪の告白 Beichte」の持つ福音的な意味に一貫してこだわり続ける(拙論「ボンヘッファーにおける罪の告白 Beichte の神学」『ボンヘッファー研究』1986 を参照)。キリスト者にとって「告白」はコインの両面のように二つの面を併せ持つ。罪の告白と信仰の告白は表裏一体である。それらは私たちにおいてアンビバレントな仕方と同時に生起する。ルターはそれを「義人にして同時に罪人」と言い切った。

私の恐れは的中した。この二ヶ月、ボンヘッ

ファーの説教との格闘は私の中に深い痛みを伴った。それは私に服従における自らの不徹底さを自覚させる痛みであり、罪の告白に導くところの痛みであった。神のみ言は私たちの罪を明らかにし、それを徹底的に裁く。罪は具体的に罪と名づけられ告白されねばならない。そのためにこそ説教と共に牧会がどうしても必要となる。牧会の核心は、カウンセリングではなく、罪に対する痛悔であり、その告白であり、和解のための償いであり、キリストによる赦しの宣言なのである。その辺りが曖昧になりすぎてはいないか。「牧会は、罪人の義認をいつもくり返して罪の義認に変えてしまうプロテスタンティズムに特有の危険から身を守る」(『説教と牧会』115)というボンヘッファーの指摘は、私たちの教会が「牧会」というものの本質を見失ってはいるのではないかという鋭い問い掛けでもある。

この小さき僕にも賜い給え。アーメン。」 s.d.g.

それにしても1935年の召天者記念主日の説教には驚かされた。ボンヘッファーは自らの10年後の死を予感していたのであろうか。彼は語る。「『主にあって死ぬものは幸いである...』。キリストにあって死ぬこと—これが私たちに賜物として与えられますように。私たちの最後の時が衰弱の時でありませぬように。キリストを告白する者として死ぬる者でありますように。老若を問わず、死の苦しみの長短を問わず、バビロンの主に襲われ捕捉されてであろうと、静謐のうちにであろうと、ただ最期に発する言葉が、『キリスト』でありますように！」(III 40)。様々な状況の転変を越えて、主に服従する者としてのボンヘッファーの歩みはひとすじである。彼を死に至るまで忠実であらしめたもの、それは彼を生涯捉えて離さなかったキリストのリアル・プレゼンスであった。

「平安を持つとは、世界の不安の中でも故郷を持っていることであり、足下に堅い土地を踏みしめていることである」(I 169)。「神を見上げるならば、そのどの瞬間も永遠である」(I 133)。ボンヘッファーの説教は最後には常に私を祈りに導く。「神よ、願わくばこのような信仰と平安とを